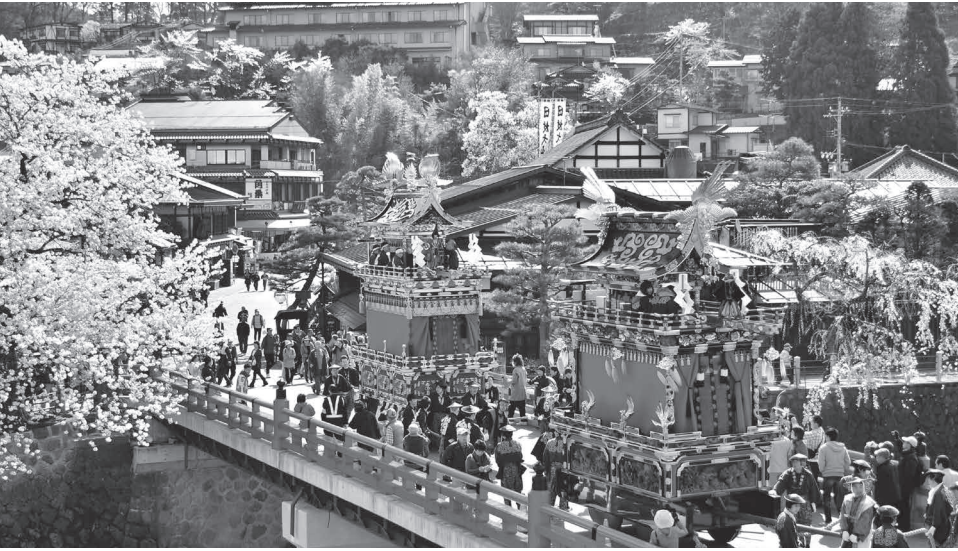


## 山・鉾・屋台行事

「高山祭の屋台行事」を含む「山・鉾・屋台行事」とは、地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となり執り行う、「山・鉾・屋台」の巡行を中心とした祭礼行事のことで、各地域の文化の粋をこらした華やかな飾り付けを特徴とします。

祭を迎える神霊の依り代よりしろであり、迎えた神をにぎやかに歓待する造形物である「山・鉾・屋台」は、木工・金工・漆



工・染織といった伝統的な工芸技術により何世紀にもわたり維持され、地域の自然環境を損なわない材料の利用等の工夫や努力によって持続可能な方法で何世代にもわたり継承されてきました。

「山・鉾・屋台」の巡行のほか、祭礼にあたり披露される芸能や口承のため、地域の人々は年間を通じて準備や練習に取り組んでおり、「山・鉾・屋台行事」は、各地域において世代を超えた多くの人々の間の対話と交流を促進し、コミュニティを結びつける重要な役割を果たしています。

### ユネスコ無形文化遺産とは…

ユネスコ無形文化遺産とは、芸能(民族音楽・ダンス・劇など)、伝承、社会的慣習、儀式、祭礼、伝統工芸技術、文化空間など無形の文化遺産を保護するために、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」を策定し、その保護を進めようとするものです。

今までに、日本では「能楽」「歌舞伎」「和食」など22件が登録されており、今回の「山・鉾・屋台行事」が23件目の登録となります。

なお、「山・鉾・屋台行事」の関連では、すでに「京都祇園祭の山鉾行事」(京都市)と「日立風流物」(茨城県日立市)の2件が登録されており、2件は同じ1つのグループとして数えられるため、国内の無形文化遺産の登録数は21件となります。



### 「高山祭の屋台行事」のなりたち

高山祭の祭礼行事は金森氏入国後、16世紀後半から17世紀の発祥とされています。加賀藩の記録では、17世紀後半に、3年に一度山王祭が行われたことが分かります。享保元年(1716)、山王祭(春)と八幡祭(秋)に、代官所の前で行列を披露したという記録があります。また、享保3年には、「高山八幡祭礼行列」という記録があり、だしだし一本、笠鉾、屋台は高砂たかさご・狸ねこ・湯ノ花ゆのな・浮島太夫うきしまたう夫婦の4台を曳き出したそうです。これは江戸の赤坂山王祭や神田明神祭を模したものとされ、江戸時代中頃には、高山祭の屋台の祖形そがたが江戸から伝わってきたと考えられます。

屋台行列が描かれたもので現在、最も古いものが、飛騨高山まちの博物館所蔵の「高山山王祭礼行列絵巻」です。文化年間(1804~1818)作成とされ、現在にも伝わる屋台が多く並び、獅子舞や鬨鶏楽、袴を着た警固の姿が生き生きと描かれています。屋台の構造および形態は現在のものと違い、装飾は控えめな印象を受けます。

文化・文政年間(1804~1830)、外装を中心とした改修を数回経て、今日の絢爛豪華な屋台となっています。材木・金融・酒造・流通関係などで富を蓄えた「旦那衆」とよばれる高山の豪商たちによって、豪華な祭礼や屋台を経済的に支える基盤が形成されました。また、江戸や京都からの東西文化をふんだんに吸収して育まれた、高山独自の価値観や美意識を大工、漆塗職人、彫刻師ら匠たちがその技術でもって答え、屋台や祭礼行事へと昇華されていったのでしょう。